

## 幼 児 の 心 理 的 發 達 (九)

東京家政大學教授 山 下 俊 郎

## 六、六歳兒の心理的發達

一 幼兒は六歳になれば就學年齢に達するわけであるが、幼稚園保有所の最年長組には六歳すぎた幼兒もかなり含まれてゐる。そこで幼兒の必然的發達の最後の段階としての六歳兒の發達について今度は考へて行くことにしたいと思う。六歳になれば就學するに十分なだけの發達が見られることはいふまでもないが、心理的發達の段階から言えば六歳兒はまだ幼兒的段階にゐるといえる。このことをいままでと同じように四つの方面から考へて見たいと思ふ。

## (一) 運動的發達

運動的發達の中で全身的運動については、すでに五歳兒の所で述べたように、幼兒たちは五歳までのあいだに一とありのからだのこなしを身につけている。いろいろの運動のこなし

しが充分に出来るようになってゐるので、幼兒はいろいろの運動の力を使つて實に活潑に動きまわる。ほとんど絶間なしに疲れることを知らないであばれまわつてゐるのが、この年齢の幼兒のほんとの姿だといつていいのである。ブランコをこぐときなど見てゐると實にうまく身體をつかうことが出来るようになってゐる。とぶこと、はねること、スキップすること、いすれもすいぶん上手になつて來てゐる。大きな床積木や机などを押ししたり、ひつばつたり、持ちあげたりして實にうまく動きまわる。全身的な身體のこなしをうまく使うことと力を使うことに子供たちは限りない喜びを感じてゐるのである。ことに男の子はすもうなんかを喜ぶし、男のお客さんや園長には力一杯にぶつかつて來て、ぶらさがつたり、よじ登つたりする。みんなこの年齢の子供たちの運動的發達の現われである。

手先の細かな巧みさもかなり進んで來てゐる。食事のと

きのはしの使い方など五歳児の所で述べたように、訓練すれば五歳児でもすでに相當にうまく使えるようになるのであるが、このことは六歳児においては一層はつきりと見られるようになって来る。いろいろの道具をつかうこともだんだんすすんで来る。はさみなども使いぶん上手に使えるようになる。ナイフ、鋸などもだんだん使うことが出来るようになって来る。このようないろいろの道具を使うことにはこの年齢の幼児は非常に興味を持つている。女の子など大きい針を使つて縫うことをすすんでやろうとするようになることが見られる。しかし、六歳児にはまだ本格的な手さきの巧みさは求められない。五歳児の所で述べたように、十歳ごろまではまだまだ基本的な大きい運動の發達に重きをおかれる時期である。あまりに細かい技巧を要求することは無理な註文である。幼児保育者はこのことを忘れてはならないと思う。

## (2) 知的發達

子供たちが六歳になれば就學年齢に達するというのは、心理的發達のすべての間において就學に耐え得るだけの發達が期待されるからであるが、中でも小學校の學習に對しては知的發達が最も大きい意義を持つている。このことから考えても六歳児の知的發達には一つの段階を劃する意味が含まれていると考えられる。

まず、言葉の發達から考えて見ると、六歳になれば子供たちは話し言葉を一とおり身につけている。五歳児ですでに大

人との話に一とおり不自由がなくなつているのであるが、六歳児はこの點で一段とすすんでいるのである。たとえば語彙について見ると、古い久保良英氏の研究で六歳の幼児が自分で使う言葉は二、二八九におよんでいる。しかし理解出来る言葉を見ると、二、二八〇であると考えられている。六歳児はほぼこれに近い理解語を持つていると考えられるので、使える語数の約二倍近いといわなければならぬ。そして六歳児はこのような言葉の發達を反映して、實によくしゃべる。このおしゃべりはもう一つの面から見ると、しゃべりたいだけの心の内容がたくさん出来て来たことを意味する。いろいろの心の中味が口をついてほとばしり出るわけである。ところがこのほとばしり方が口で間に合わない場合がある。もどかしくなつて来る。そこで六歳児にはどもりが見られることが多くなるのである。

六歳児は自分のまわりの生活環境に對してまたいろいろの知識を身につけて来る。例えば、赤、黄、青、緑というような色の名前を六歳児の大部分の子供たちは知つている。またいろいろの生活經驗をすでに重ねて來ているので、いろいろの假定的な場面に對して適當な解決の仕方を考えることが出来るようになっていゝる。「もしあなたがどこかへ行こうとして電車に乗りおくれたらどうするの?」と聞くと小さい子供だと「行くのをやめちやう」というような答をするであらう。しかし、六歳児は「次の電車が來るのを待つてそれに乗

つて行く」という答をするのがふつうである。あるいは「あなたは何か人の物をこわしたときにはどうするの？」と聞くのと「あやまる」というようにその場に即した正しい答をするようになっていく。このようなことは普通には常識といわれることであるが、この常識というのは日常の子供の生活の中にしじゅう出て来ることがくり返されている間に、このような行動と態度とを子供たちが身につけることによつて生れて来るものである。たゞ教えられたというだけではほんとの身についた知的生活ではないと考えられる。経験を重ねることによつてこのような實際に即した知識が身につくのである。六歳児はこのような経験から實際の生活の技術としての知識をすでに身につけているのである。

記憶の力も六歳児では相當にすすんで来ている。短い文章——もちろん幼児の繪本などにあるような幼児の理解するもの——を読んで聞かせると、すぐにそのままいえる。もちろん一つやそこいらは間違ふことはあるが、大體よく覺えるようになっていく。また積木を四個ならべて置いて、これをいろいろの順序でたいたいで見せると、それをそのまま模倣してたたくことが出来るようになっていく。記憶は八歳ごろになるともの凄しい勢いで發達するのであるが、六歳児はそろそろその激しい勢いへの上り坂に掛つているといえるであろう。推理力や構成力といったような面でも六歳児はまた一段と發達している。五歳児の所で見たような碁石を一定の關係にしたがつてならべるといふようなしごとをやらせて見てもか

たりいろいろいいの關係をつかんでいることが見られる。推理の力がそれだけすすんで来たのである。また二枚の三角形の板を與えていろいろの形を作らせて見るとかなりよくいろいろの形を組み立てる。積木を積んでも相當に複雑なものを組み立てて積んで、いろいろの形を作ることが出来るようになっていく。このような力がすすんでいいることは繪の發達を見ても分かる。六歳児はすでに色々のものを心の中に摺みそれを表現するだけの能力を備えるようになっているのである。

次に、六歳児の全體的なものの考え方について見ると、一般に幼児はいわゆる自己中心的な考え方の世界にいる。自分と他との立場がまだ十分に區別されない未分化な状態にいたのである。この自己中心性というものがもとなつて幼児には、想像と現實との區別がつかぬかつたり、自分と同じようにすべてのものに心を認めるといふアニミズムといわれる考え方をしたりする。このような自己中心性にもとづく幼兒的な考え方はだんだん年齢を重ねるにしたがつて段々と解消して行くのであるが、六歳児はそろそろと自己中心性というものから少しでもぬけ出そうという所にかかつている。すなわち、想像と現實との境目が少しはつきりしかけて来て居る。またすべてのものが自分と同じように心を持つているとは考えないで、動くものだけに心を認めるといふ段階に入りかけている。もちろんこれは幼兒的な自己中心性の段階からぬけ出そうという體勢を示しているというだけであつて、次への發達をはらんでいる状態に在るといふべきであろう。